

本日、こうして皆さんに博士、修士、学士のそれぞれの学位記を授与できることを嬉しく思います。学位記とは、専門的な知識、技術、態度を修得したことを、日本福祉大学として証するというものです。それは所定の科目を履修したというだけではなく、各学部大学院のディプロマ・ポリシーに照らして、しっかりと専門性を身に付けたということを大学が証明するものです。本日、みなさんが手にする学位記には、これまでの大学生活の全てが刻まれているのです。そのことを、どうか誇りに思ってください。

みなさんは、日本福祉大学に入学したときの自分自身に、今ならどんな言葉をかけますか。心配しなくても大丈夫だよという人もいれば、もっと頑張れと言いたい人もいるでしょう。あ那时的自分と、今日ここにいる自分。学生生活は決して楽しいことばかりではなかったかもしれません。でもこうして振り返ることで、みなさん一人ひとりが確実に成長してきたことを実感できるのではないのでしょうか。

こうした日常の営みが「ふつうの 暮らしの しあわせ」を形作っていくのです。みなさんは日本福祉大学の学生として、そのことの大切さと同時に難しさを学んできたと思います。

学生時代の「出会い」は、生涯の糧になると言われます。これから社会に出ても、人とのつながりが、あなた方の人生を豊かにしてくれるはずです。ただ人と関わることは、ときに煩わしいこともあります。ケンカになったり、気まずい関係になったり、傷つけられることもあるかもしれません。でも誰かがそばにいてくれるという安心感を私たちは知っています。私たちは、身の回りで気になる人がいたら、そっと寄り添うことの大事さも学んできました。そして何よりも自分自身を含めて、ふくしとはいのちの尊厳を慈しみあうことだと学んできたはずです。

しかし世界では自国第一主義や分断と格差が拡大しています。これまで大切にしてきた多様性や包摂性を揺るがしかねない事態が進行しています。今も戦争によって市民のいのちが奪われています。

ふくしは当たり前にあるものではなく、私たちが知恵を出し合い、自ら創り出していかなくてはいけないのです。病気や事故、多発する自然災害、一方で技術革新は社会環境を大きく変えています。そうした予測不能で混迷を極める時代のなかで「ふつうの暮らしのしあわせ」を支えていくのはとても大変なことです。でも日本福祉大学で学んだあなた方は、Well-being for All、万人の福祉のために挺身する志をもって社会に旅立ちます。これからの社会にとって、みなさんの存在は大きな「希望」になるのです。

そんな皆さんに、茨木のり子さんの詩を贈りたいと思います。

ばさばさに乾いてゆく心をひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて
初心消えかかるのを暮らしのせいにはするな
そもそもがひよわな志しにすぎなかった
駄目なことの一切を時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄
自分の感受性くらい自分で守ればかものよ

(茨木のり子『自分の感受性くらい』より抜粋)

これを卒業にあたって、はなむけの言葉とさせていただきます。

最後になりましたが、本日のこの日を無事に迎えられたことを、ご家族や保護者の皆様、ご来賓はじめ関係者の皆様方に、大学を代表して心から感謝申し上げます。

あらためまして、ご卒業、おめでとうございます。

2026年3月20日
日本福祉大学 学長 原田正樹

※当日挙行された式典の学長式辞全文を、ウェブサイト掲載用に整え掲載しています。